

<アフリカ協会原稿>

「そこにいないワレワレ」

周知のように今、アフリカ大陸において中国はその存在感を増している、批判も多い、曰く囚人を建設工事等に送り込んでいる、貧乏人に先頭切らせて自国の貧困問題の一解決策にしている等々、だがこれは5年、いやもっと“古い情報”、(政府関係者)だ、仮にそうだとしてもそれは何処まで行っても中国の国内問題だ、さらに現時点でそのことについての見るべき研究はこの国(日本)に無いに等しい、そもそもアフリカにおける中国、いやそれ以前にアフリカに関しての“戦略研究/紛争からテロ、資源そしてビジネス進出等”もまた無いに等しい、とても中国のアフリカにおける活動研究までたどり着けない

アフリカと日本を往復して40年余、テレビ番組のコーディネーターから紛争取材(ソマリア/スーダン/ルワンダ/コンゴ/アンゴラ/イラク/ブルンディ etc)、ツアー・ガイド等々、日本社会ではたいして存在感の無い私だがちがった角度でアフリカに接することができた、その実感から言って先に書いた中国と比べると、ほとんどそこに日本のプレゼンス(存在感)は無いとあえて言い切っている、いるのは大使館、援助関係を中心とした一部の方々のみである、某アフリカ国の大使館にお邪魔した時、館員の方が言った、「いやあ、此処にいる日本人の8割は大使館、援助関係者ですよ」と、多少の“無念?”、さも含まれていたような気もする、そうした現実にはジャーナリストとして私は“危機感”を感じる、何故か、対するにあまりにも中国、韓国、ほかのアジア諸国の対アフリカ攻勢、存在感が増しているからだ、それについての本格的メディアレポートもない、あったとしてもアフリカの某国でこんなに凄い工事をやっている止まりだ、その背後にある彼らの戦略等についての本格的分析などほとんどない

そのことをどう見るかはそれぞれの立場によって異なる、映像、取材ジャーナリストとして現実を見ると、危機感というのは、今そこにいない、ビジネスチャンスを失っているという言葉に置き換えてもいい

——1990年代から2000年の初めにかけてアフリカ現地取材レポート、あるいはエッセイという形で、「月刊アフリカ」には一方ならぬお世話になった、当時はカラーグラビアがあり、内容的にも多岐にわたっていたように思う、それが次第にグラビアは消え、印刷された写真に代わり、(私の)アフリカ現地取材レポートへのニーズもなくなった、今は季刊と聞く、さらにアフリカ協会加盟の企業数も減っているという、しかしこれは時代と世界に逆行しているのではないか、しかも世には“グローバル”、“グローバル人材”等々がこれでもかと氾濫している・・・

言葉、掛け声とは裏腹に、ことアフリカに関する限り日本が世界のカレントに逆行していることは間違いない、アフリカを専門とした雑誌なのであえてこうした言い方をさせていただいている

——以下現場取材を通してこの目で見て感じたことをジャーナリストの主観的目線で書かせていただく、当然、反面教師、鏡としての中国、韓国が出てくる、やや話が飛躍するが、そこから、今巷を騒がせている、日本メディアの尖閣、竹島問題からは決して見えてこない彼の国々の考え方、行動の一端もまた見えてくる、つまり日本としての「戦い方、もまたそこに見えてくるということだ

#### ●タンザン鉄道／中国＜戦略性＞

90年代も終わろうとするある日、わたしはビデオカメラを持って、タンザニア南部の国立公園の外を歩いていた、田舎道と並行して一本の鉄道線路が地平線の彼方に消えていた、歩きにくい凸凹道に疲れたので線路に上がった、タンザン鉄道（現地では通称T A Z A R Aとも呼ばれている）だ、隣のザンビアまで2000キロ近い鉄路がサバンナの彼方に消えていた、わたしはカメラを回し続けた、その時コンクリ製の枕木の上に刻印されたある文字が目に入った、そこには「中華人民共和国」と漢字で穿たれていた、ふと前に目をやるとそこにも刻まれていた、その次もそのまた次も・・・、わたしはざっと計算してみた、仮にザンビアまで200万本の枕木が敷かれているとする、そのすべてに「中華人民共和国」が穿たれ続いているのだ、彼らは自らの存在をアフリカの大地に印している、驚異とっていい、しかもこれは現在のアフリカにおける中国批判が喧しいはるか以前、1970～1975年の間（東西冷戦下、毛沢東時代）に延べ10万人を超える人力を持って造られたものだ、ザンビアのコパーベルトに産する銅を運び出すためのものだといわれている、現在のアフリカ大陸における激しい資源争奪戦が戦われるはるか以前から、ドラゴン（中国）はアフリカの大地に深々と消えることのない鉄の楔（楔）を打ち込んでいたことになる、しかも建設援助の条件は低利の無償に近いものだったという、敵の懐は深く、また戦略性に富んでいる、このことを忘れてはならない、是非自分の目で今なお健在なタンザン鉄道（大陸にのたうつドラゴン）を見ていただきたい

#### ●ナイロビLGショップ／韓国＜情報／展開力＞

こないだ（2012年10月）、ケニアの首都ナイロビで、中国・韓国ファクターの取材をした、実際、サムスン、LGの進出はどうなのかについて町の電気屋を訪ねた、LGの家電を扱っている店はナイロビ有数のショッピング・モールの中にあつた、マネージャーは30分ならという条件付きで、取材と地元ケニア人買い物客へのインタビューを許可してくれた

（私）「ここあるのはほとんどがLG製品ですが、日本のソニーとかパナソニッ

ク、シャープについて知っていますか？」

(男性客)「聞いたことはあるけど、今はやっぱりLGとかサムスンの韓国製品が世界的ブランドだし、クオリティも高いと聞いてますよ」

「これまでソニーとかの日本の家電は買ったことがありますか」

「いや、ぜんぜん買いません」

日本で聞く以上の凋落である

店には所狭しと、昭和のある時期の日本を思わせるような白物家電が並べられていた、フロアではサムスンの薄型大型テレビが映像を流していた、単純な疑問が湧いた、何故日本の一流家電メーカーにはこうした展開ができなかったのかと・・・、いろんな事情もあるだろう、しかしケニヤ辺りでは確実に“中流”クラスも育っている、購買力、意欲も非常に高い、マーケットはあったのだ、しかし日本のメーカーでしっかりと現地駐在員を置いていた企業はほとんどないと聞く、ケニヤの友人がいうトレッタリー（トイレ周りの数々の品）はこれから伸びると聞き、調べた、しかしすでに中国がバスタブから便器、細かいタイルに至るまですでにアンテナショップをオープンしていた、恥ずかしい話私はこの件で日本のTOTOに電話してみた、答えはサイズ基準等の問題があり、今すぐの進出は難しいとのことだった

●韓国ダイヤモンド・ビジネス／韓国<人間力／コミュニケーション力>

先日、友人のカメラマンから面白い話を聞いた、「こないだタンザニアの山奥に行ったんですけど、びっくりしたんです」

「何があったの？」

「韓国人たちがダイヤモンドを掘っていたんですけど（それも中々の話だが）、彼らって全然英語がしゃべれないんですよ！」

「そうなんだ、すごいね！」「言葉ができなくてもアフリカでダイヤモンド・ビジネスをやっちゃうんだね」

言葉ができなくてもダイヤモンド・ビジネスを見事にやっている、何故なのか、それはつまり彼らに地元のタンザニア人たちと渡り合う“人間力”あるいは“コミュニケーション力”があるということだ、もちろんそれは日本の若い学生たちが就職セミナーで聞かされる、“コミュニケーション力”“グローバル人材”といったレベル、類の話どころではない、アフリカでのダイヤモンド商売の話だ、日本でいう何とか力、それはせいぜい？トータル何点といったレベルだ、この場合の韓国の人たちがはたしてトータル800点なのかどうか、推して知るべしだ、巷に溢れる“日本版：グローバル人材”、いったいそれって何なのか、トータル7、800点だけでアフリカ、他の世界でビジネスを展開できないことはだけは確かだ

世界に出て、身銭を切って苦勞して、稼いで、地元の人たちと渡り合う――

あまりにもこうした体験の積み重ね＝体験・知恵・情報・ネットワーク構築が日本人には無さすぎる

●中国大使館＜現場裁量、即断＞

2005年以来、アフリカ・スタディ・ツアーを催行している、某大学のゼミ（国際政治）を中心に、他大学生、社会人など多数参加いただき毎年アフリカを訪ねている、これまでの訪問国はルワンダ、タンザニア、ケニアなどで、目的はその時々々の先端的問題、あるいはグローバル・イシュー等について学ぶことだ、従来型の現地のNGOとの交流というよりも、よりジャーナリズム的視点で、とくに問題の背景などについて知ろうというものだ、これまで“虐殺サイト（当時）”、“難民キャンプ”、“ビジネス現場”、“政府関係”、“援助”、“スラム”、“ストリート・チルドレン”等々の問題、現場を歩いてきた

2010年、ルワンダ訪問時、すでにアフリカにおける中国の存在感はメディア、研究者の重要なテーマとなっていた、事前に私は現地の知人を通じてダメもともかもしれないが在キガリ中国大使館訪問のリクエストをしておいた、難しい時期でもあり、内心断られるだろうと思っていた、ところが現実にはかなり歓迎されたのだ、これは驚きであった、一介の日本の学生集団が在アフリカの中国大使館を訪ねる、我々の背景もはっきりしないし、目的も不明だ、私が知人に頼んでおいた大使館への伝言、訪問理由は、“最近の貴国（中国）のアフリカにおける攻勢はすごい、その実際とワケについて少しでも知りたいので、事情が許すのであれば是非在キガリ貴国大使館を訪問したい”である

当日我々16人はキガリ市内の大使館を訪ねた、目の前の建物は中華風の圧倒的作りであった、話の内容は「WIN. WIN政策」「アフリカ諸国政府との相互理解と親密な協力関係」「医療、農業にも力を入れている」「アフリカとの長い信頼関係」といったもので特別なものではなかった、感銘したのはその受け入れる姿勢である、しかも担当してくれたのは20代半ばの女性で、名刺にはattachéとあり、その若さにも関わらず相応の裁量が認められていることがみえた、ブリーフィングもビデオとパワポを用いた本格的なものだった、アフリカへの彼女なりの情熱が伝わってきた、彼女の熱意が我々を招き入れたといった感じさえたが、当然上の許可があつてのことである、小さな事であるがそこで示されたのは「柔軟性」と「個と現場の裁量」である、もちろん現実の政治、外交はさらに複雑で、難しいのだろうが、それにしてもはたしてこうしたことを日本の現場と個はできるだろうか、時代が求めているのはこうした現場・現実への対応力である、1時間近いレクチャーの後、私は図々しくもさらにリクエストをした、どこか“建設現場を見たい！”、彼女は即座に持っていた携帯でどこかに連絡をとった、“OK”、“近くのホテルの建設現場に行きましょう”、これは言うまでもなく個人による「即決（素早い判断）」である、

さまざまな点でかの国を批判するのは簡単であるが、僭越な物言いであるが想像以上にかの国はしたたかであり、学習も速い、ただしこうしたことはいわゆる巷間に溢れる“日中、情報からは見えてこないだろう、アフリカだからこそ見える中国のもう一つの姿だ

#### ●CHINA・ROAD<本音>

もちろん、いいことばかりではない、去年（2012年）、某テレビ番組で、ケニアにおける中国の存在について取材した時だ、デモが頻発しちょうど日中間が尖閣問題で揺れていた時だ、ナイロビ周辺の道路建設を請け負っているのは「CHINA・ROAD」という会社だ、ティカ高速道路、ランガタ・バイパス道等大きな道路、インフラ工事を手掛けている、我々はちょうどキベラ・スラムを割るようにして建設中の現場を直撃した、目の前では朝早くから“中国道路、”という文字が書かれたブルドーザーが轟音と共に煙を吐いていた、我々は素早くカメラを回した、始まって30分も経った頃、赤土の砂埃を巻き上げながら一台のピックアップが駆け込んできた、停止するや一人の中国人が降りてきて、“STOP！撮影、”と怒鳴り込んできた、そうした場合に備え我々としても地元のケニア人有力者？を用意していた、なだめすかしてその場は何とか収まったが、前後して別のCHINA・ROAD取材（オフィス）の交渉をしていたケニア人スタッフから電話連絡が入った、ぜんぜんダメだという、事務所の中国人マネージャーは怒っているという、“何故！？どうしたんだ！、”と聞くと、朝は立っていた「CHINA・ROAD」という立て看板も引っこ抜いたという、撮影させないためだという・・・、友人のケニア人に向かって中国人マネージャーは「なんで今、日本人にうちの会社を撮らせなきゃならないんだ！」と何度も繰り返していたという、明らかに尖閣問題の影響である、これは、現場では中国人に建前は無いということだ、すべて本音で向かって来るということだ

#### ●北京ジュバ・ホテル／中国<別の顔>

先に今の中国・IN・アフリカ情報（あるいはイメージ）は5年以上古いと書いたが、南スーダンのジュバにある「北京ジュバ・ホテル」はその具体例だ（現在は先の火事で休業中）、2008年私は、南部スーダン中国石油地帯取材（ユニティ州ベンチウ Bentiu 周辺）のため、ジュバに入り北京ジュバ・ホテルに滞在した、当時部屋数約300、1泊150ドル、稼働率80%とかなり利益を出していた（新生南スーダンでのビジネスはかなり厳しく現在はダウン）、従業員130人の内訳は現地人（ウガンダ人、南スーダン人）100人、中国人30人だった、オーナーは北京出身の4人のビジネスマンの共同出資だった、オーナーの一人、李氏はインタビューに答えて、“困難は多いと思いますがチャレンジです！”と語ってくれた、気が付いたのは若者が多かったことだ、話を

聞くと「英語の勉強がしたくて来ました、また「ホテル業について学びたかった」という答えが返ってきた、翌年（2009年）再び尋ねると、李氏の側には若くてきれいな英語の通訳兼秘書の中国女性がいた、そこには日本に伝わってこない中国があった、李氏によれば現地従業員の給料は100ドル～200ドル前後（毎月1万～2万ドル払っていたことになる）、さらに隣には中国領事館が隣接していた、紙数の関係で書けないがもちろん私はJICAのプロジェクト等も取材した、そこはまさに最近言われるところの「援助」VS「ビジネス」の最前線でもあった、最近一部で言われている「援助」から「ビジネス」へ・・・、TICADを目前に控えた今、はたして日本はアフリカでそれを実現できるのだろうか、国家の存続と成長を支えるエネルギー資源（鉱物などの非エネルギー資源も同様）確保、さらにモノ作りと市場の獲得まで、余ほどしっかりとした資源外交戦略の構築が求められる、耳触りの良い単なる「開発援助」のみで資源確保＝日本の成長の維持はどこまで保証されるのか、一部専門家によれば、東アジアの緊張を待つまでもなく米中の戦い（資源争奪）はすでにアフリカで始まっているという（2008年、US-AFRICOM/米アフリカ司令部の創設はアフリカ大陸における中国の牽制が目的の一つ）、先のアルジェリア事件は資源獲得において世界は新たな時代＜分捕り＞に入ったことを警告している